

教室活動としての上級読解の可能性

本発表は、上級クラスにおける生教材使用を教材選択の基準、教材作成の過程、教室活動の面から振り返る実践報告を目的とする。

本コースは、日本語学習履修時間数が約 500 時間を超えた上級レベルを対象に、学習者の「気づき」と「学び」をキーワードに、クリティカルな読解で意見交換する中で自らの思考を深められるようになることを学習目標の一つに掲げている。

上級読解の授業は、個人対テキストの内容理解が中心になりがちであるが、教室活動としての読解授業の意義を見出すため、協働を促す授業作りも求められる。

また、オンラインによる様々な日本語のテキストへのアクセスの一般化で、教室外の学習者の日本語使用が多様化しており、授業向けの生教材の選択も複雑になってきている。中上級の日本語教科書を使用して来た学習者の中には、日本語教科書で扱われる典型的なテーマに教科書臭さを覚え、新鮮な生教材を強く求める傾向がある。

トピックへの興味が、時間と労力をかけて作品と関わって内容理解を目指そうとする学習者のコミットメントを左右し、さらには、客観的な立場（建設的ディタッチメント）からの意見交換を通して批判的思考を深めていく。このコミットメントと建設的ディタッチメントの相互作用の中で、ことばは意味伝達の道具本来の透明度を獲得していく。

本コースで過去二度にわたって用いた短編小説と脚本と朗読劇を用いた授業を振り返り、批判的思考を深める学習プロセスとしての上級読解授業の可能性について考察する。